

美術評論家連盟

声

明

東京都美術館では、利用団体や入場者数の増加、建物の老朽化、施設の不備などを理由に、現在かなり大規模な改築が計画されています。すでに昨年、美術家、学識経験者代表に都の関係官庁を加えた都美術館建設準備委員会がつけられ、地上三階地下一階、総経費約五十億円にのぼる予算案が、近く都議会に上程される予定と聞いています。

これに対して、現在までこの美術館を本拠に公募展を開催してきた借館団体側からは、工事期間中かわりの展示場をあつせんすること、改築後借館料をあまり値上げしないことなど、つよい要望が都や美術館当局にたいしてだされています。

しかし、私たちはこの問題をたんに借館団体の利害だけにまかせてはおけないと考えます。なぜなら、美術館の活動とは本来、(1)系統的なコレクションの展示、(2)斬新な企画展の主催、(3)美術と公衆を媒介する啓蒙教育活動、この三つの機能を柱とするものであり、都美術館運営審議会の答申をみても、これらのことはいちおう確認されています。その点現在までの都美術館は、美術館とは名ばかりで、系統的なコレクションも魅力ある企画展示もなく、社会教育的な活動もとぼしく、実質上は大きな貸画廊にすぎません。このまゝでは世界各国の首都の美術館にくらべてまことに変則的であるだけでなく、都美術館条例に規定されたところにも背反しています。私たちは、美術館本来のあり方を忘れた現在の状態で、建物だけが改築されることにつよく反対せざるをえません。

以上の理由から、私たちは改築にあたって美術館本来の機能をはたしうるよう考慮されることを都、美術館関係者のみなさんに要求し、そのための世論をつよくよびおこしたいと思えます。私たちはさしあたりつぎのことを要望します。

(1) 現在進められている改築計画をいちおう白紙にもどし、常設コレクション、企画展示、社会教育的活動を三つの柱とした美術館とするため、組織および建築の計画をたて直すこと。

(2) このような計画が明らかになつた上で、建築も当然新しく設計し直すこと。

(3) 少なくとも館長以下学芸員のスタッフには、美術の専門家を加えて充実をはかること。

昭和四十四年 4月2.28 日

美術評論家連盟

